第２章　万里の長城と遼東

弥生渡来人は細形銅剣をもっている。細形銅剣は遼寧式銅剣と呼ばれる系統の剣であり、中国遼寧地方にその起源があるという。
倭人はおそらく中国遼寧地方を経て、朝鮮半島の南部（高天原）へ来たのであろう。弥生時代直前の渤海沿岸の歴史を調べてみることにしよう。

1　文献から描かれた万里の長城

(1) 秦・漢時代の万里の長城

紀元前２２１年、秦の始皇帝は天下を統一し、万里の長城を築く。その位置は日本の学者も中国の学者もほぼ同じところに比定している。

貝塚茂樹氏は『中国のあけぼの』（河出書房）の中で万里の長城を「図 19 万里の長城　『中国のあけぼの』（河出書房）」のような位置に比定している。

『史記』（世界文学大系）（筑摩書房）の小竹文夫・小竹武夫訳でも、「秦漢時代図」の中で万里の長城を「図 20　万里の長城　『史記』（筑摩書房）」のような位置に比定している。

中国でも同じである。譚其驤主編『中国歴史地図集』（地図出版社）の中でも万里の長城は図のような位置になっている。

図 21　譚其驤主編『中国歴史地図集』より作図

郭沫若主編『中国史稿地図集』（地図出版社）でも図 22　郭沫若主編『中国史稿地図集』のようになっている。

このように万里の長城はどの歴史地図を見ても現在の遼寧省の遼河の東まで延びている。

ところがこれらの地図をよく見ると万里の長城の東端は皆少しずつ違う。なぜ万里の長城の位置は人によって違うのであろうか。

それは万里の長城の位置が遺跡にもとづいて比定されているのではなく、文献にもとづいて描かれているからであろう。

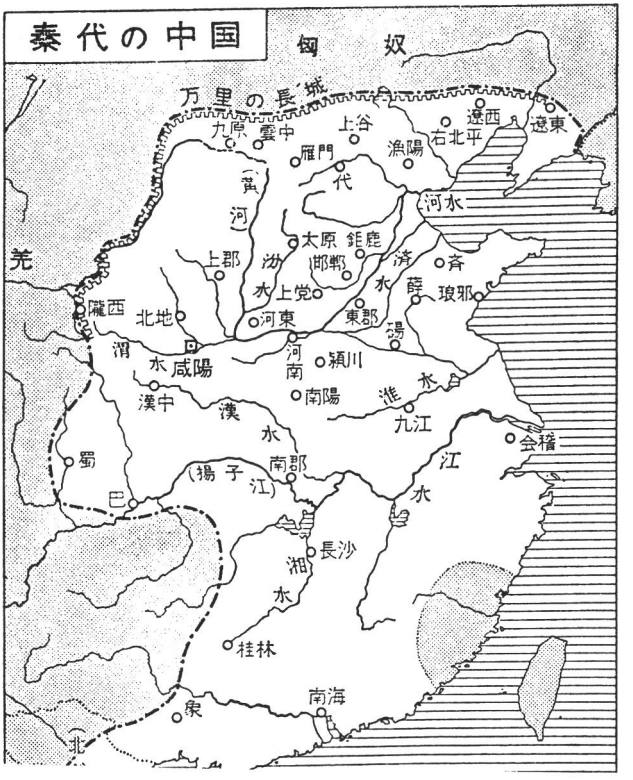

図 19　万里の長城　『中国のあけぼの』（河出書房）

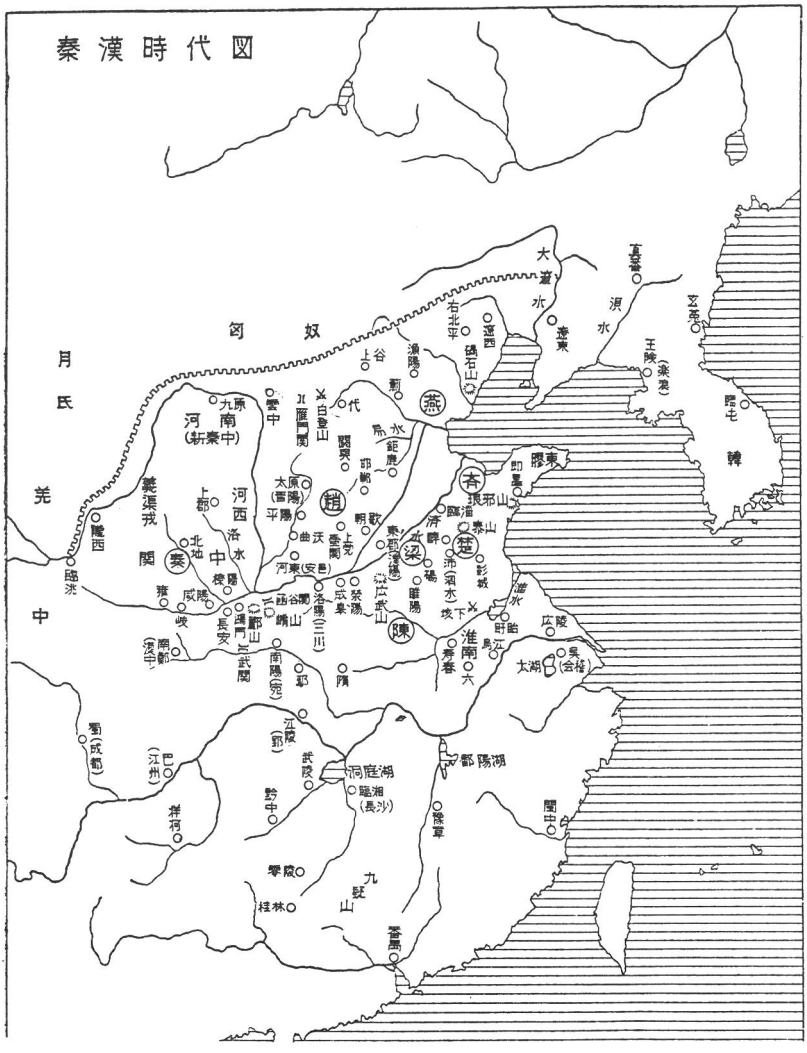

図 20　万里の長城　『史記』（筑摩書房）

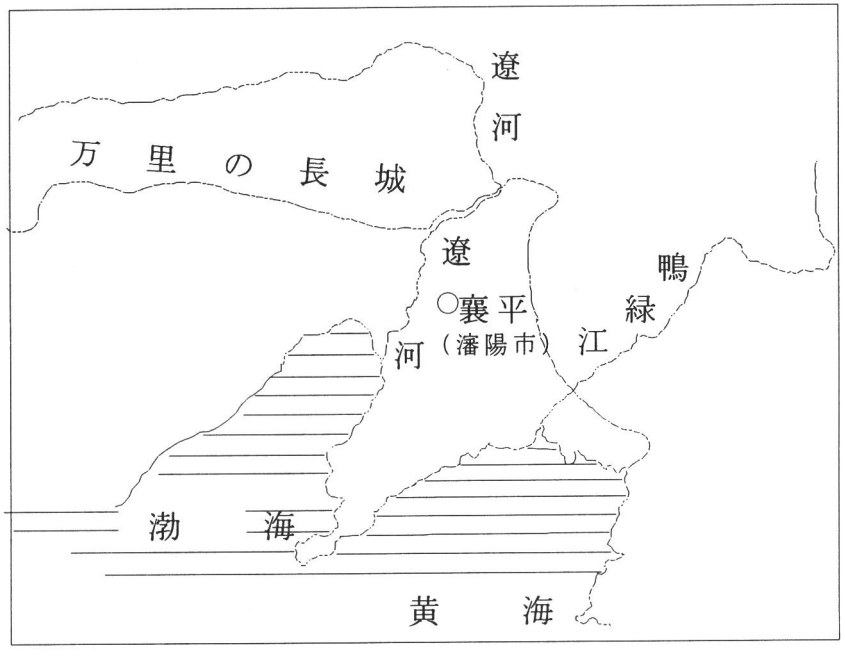

図 21　譚其驤主編『中国歴史地図集』より作図

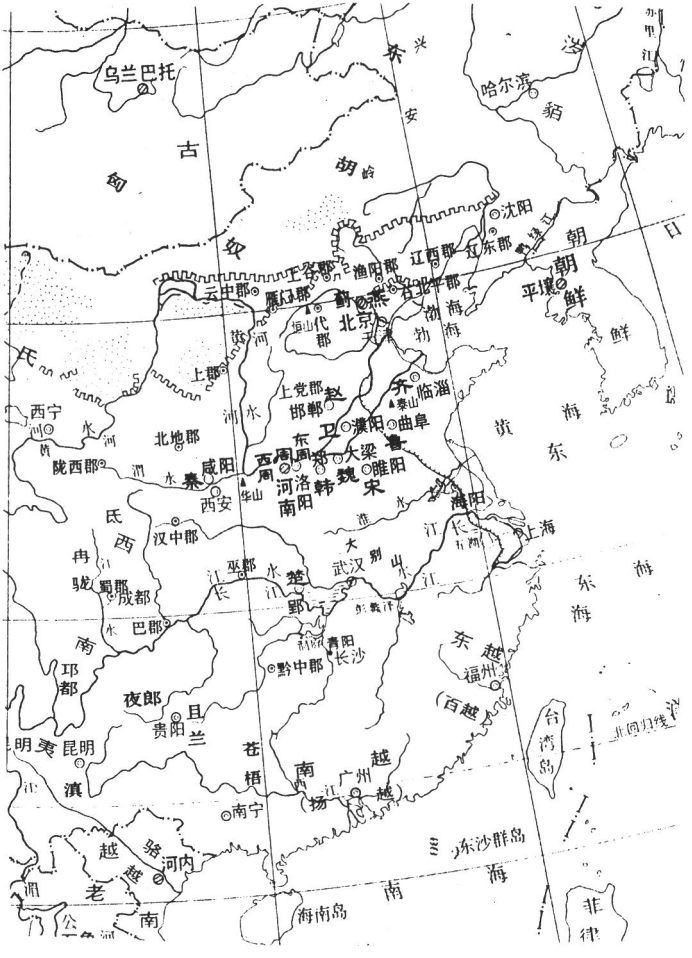

図 22　郭沫若主編『中国史稿地図集』

(2) 万里の長城の築城

万里の長城が築かれるときの様子が『史記』に書かれている。

秦昭王時、義渠戎王與宣太后乱、有二子。宣太后詐而殺義渠戎王於甘泉、遂起兵、伐残義渠。於是、秦有隴西・北地・上郡、築長城以拒胡。
而趙武霊王亦変俗胡服、習騎射、北破林胡・楼煩、築長城。自代並陰山下、至高闕為塞。而置雲中・鴈門・代郡。
其後、燕有賢将秦開。為質於胡、胡甚信之。帰而襲走東胡。東胡卻千余里。（中略）燕亦築長城。自造陽至襄平。置上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡。以拒胡。
當是之時、冠帯戦国七、而三国辺於匈奴。　　『史記』匈奴列伝

（概訳）秦国は昭王の時に長城を築く。昭王（昭襄王）の在位は紀元前３０６年－２５１年である。昭襄王の母宣太后は義渠の戎王と私通して二人の子供をもうけた。しかしある時宣太后は義渠の戎王を騙し甘泉宮で殺し、兵を起こして義渠（城）を伐ち滅ぼした。秦は隴西・北地・上郡の地を得て、胡族の反撃を阻止するために長城を築く。これが秦の長城である。
趙国は武霊王の時に長城を築く。武霊王の在位は紀元前３２５年－２９９年である。武霊王は北方民族に対抗するために自ら北方民族の服（胡服）を着て、騎射を習い、北方の林胡・楼煩を攻めて取り、長城を築いた。長城は代から陰山の下に沿い高闕に至るという。そこに雲中・鴈門・代郡を置く。これが趙の長城である。
燕国は将軍秦開を胡へ人質に出す。胡族は秦開を甚だ信じたという。ところが秦開は燕に帰ると逆に東胡を襲い敗走させる。東胡は千余里退く。燕も亦長城を築き、造陽から襄平に至る。上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡を置き、以て胡を防ぐとある。これが燕の長城である。紀元前２８４年頃のことであるといわれる。

『史記』はこの記述の最後に、「戦国の七雄のうち三国は匈奴と辺をなす」と書いている。秦・趙・燕の三国は匈奴と境界を接しており、常に北方民族の脅威におびえていた。これが三国に長城を築かせた原因である。

秦の始皇帝は他の六国を滅ぼし天下を統一するとこれら三国の長城を利用して万里の長城を築く。

> 後秦滅六国。而始皇帝使蒙恬将十萬之衆、北撃胡。悉収河南地。因河為塞、築四十四縣城臨河、渉適戍以充之。而通直道、自九原至雲陽。因辺山険塹谿谷可繕者治之。起臨洮至遼東、萬余里。
>
> 註…括地志云、秦隴西郡臨洮縣、則今岷州城。本秦長城首。起岷州西十二里、延袤萬余里、東入遼水。　『史記』匈奴列伝

（概訳）他の六国を滅ぼして中国を統一した秦の始皇帝は蒙恬（もうてん）を使わし、十萬の兵をもって北の胡を撃ち、河南の地を得て、黄河を塞として四十四縣城を黄河に沿って築かせ、遠地の守備兵を渉（うつ）してこれに充てたという。そして直通の道を通した。それは九原から雲陽に至るという。さらに山険により、また谿谷を利用して修繕すべきはこれを治し、臨洮より起こし遼東に至る、萬余里。これが万里の長城である。

同じことが『史記』蒙恬列伝にも書かれている。

> 秦已并天下。乃使蒙恬将三十萬衆、北逐戎狄、收河南、築長城。因地形用険、制塞、起臨洮至遼東。延袤萬余里。
>
> 註…［正義］遼東郡在遼水東。始皇長城東至遼水、西南至海之上。　『史記』蒙恬列伝

（概訳）秦はすでに天下を併す。乃ち蒙恬をして三十萬の衆を将かせ北の戎狄を駆逐し、河南の地を収め、長城を築かしむ。因りて地形は険を用い、塞を制して、臨洮より起こし遼東に至る。延長萬余里。

万里の長城は「臨洮より遼東に至る」と書かれている。長城の東端は遼東である。燕の長城は「造陽より襄平に至る」とある。万里の長城の東側は燕の長城を利用して造られているから、万里の長城の東端は「遼東」であり、また「襄平」である。

従来は、「遼東」は現在の遼寧省であり、今の遼河の東であると解釈してきた。したがって「襄平」は現在の遼陽市であるとされ、万里の長城は遼陽市まで延びていると考えられてきたのである。これが歴史地図に描かれている万里の長城である。

2　万里の長城と碣石山

(1) 碣石山に至る

万里の長城の位置は『水経注』に次のように書かれている。

始皇令太子扶蘇與蒙恬、築長城。起自臨　至於碣石。則是城也。

『水経注』巻三

（訳）秦の始皇帝は太子の扶蘇と蒙恬に命じて長城を築かせた。臨洮より起こし、碣石に至る。是（長）城なり。

『史記』には「起臨洮至遼東」と書かれている。『水経注』には「起自臨洮至於碣石」とある。「遼東」と「碣石」は同じ所を指していることがわかる。

「碣石」については『史記』の（註）に次のように書かれている。

夾右碣石、入于海。
　註…［集解］孔安国曰、碣石海畔山也。
　　［索隠］地理志云、碣石山在北平驪城縣西南太康。
　　地理志云、楽浪遂城縣有碣石山。長城所起。
　　水経注云、在遼西臨渝縣南水中。蓋碣石山二有。此云夾右
　　碣石入於海、當非北平之碣石。　　『史記』夏本紀

（註）の［集解］には、「碣石（山）は海の畔（ほとり）の山である」と書かれている。また、地理志に云う「楽浪遂城縣に碣石山有り。長城の起こる所」とある。長城の始まりは「碣石山」である。

地図を見ると、現在の万里の長城の東端は山海関であり、その南に碣石山がある。ここが「長城のはじまるところ」であろう。始皇帝の築いたという万里の長城は現在の万里の長城とほぼ同じところに築かれていることがわかる。

現在の万里の長城は明時代に築かれたものである。秦の始皇帝が築いた万里の長城を修復して造られているのであろう。

図 23　万里の長城と碣石山

(2) 始皇帝と碣石山

碣石山は古来から有名な山である。始皇帝はこの山に記念碑を建てている。

三十二年、始皇之碣石、使燕人盧生求羨門・高誓、刻碣石門。其辞曰、
（後略）　　『史記』始皇帝本紀
（訳）始皇帝は碣石（山）へ行き、燕人盧生に羨門・高誓を求めさせ、碣石門に文字を刻んだ。その辞（言葉）は次のようであった。（後略）

図 23　万里の長城と碣石山

始皇帝は中国全土を統一し、その偉業を天下に示すために碣石山に登り、石にその辞を刻んでいる。始皇帝の二世も碣石山に登る。

二世皇帝元年春、二世行郡縣。李斯従到碣石。並海南至会稽。

『史記』始皇帝本紀

（訳）二世皇帝の元年（前２０９年）春、二世（皇帝）は郡縣の巡幸に出た。李斯は従い、碣石（山）に到る。そこから海に沿い、南へ行き会稽に到った。

始皇帝も二世皇帝も碣石山に登っている。この碣石山は「起自臨洮至於碣石」とある碣石山のことである。『水経注』も、『史記』の（註）も、万里の長城の東端は碣石山であると書いている。

3　万里の長城と遼水

(1) 遼水に至る

『史記』蒙恬列伝の（註）には、長城は「東は遼水に至る」と書かれている。

秦已并天下。乃使蒙恬将三十萬衆、北逐戎狄、收河南、築長城。因地形用険、制塞、起臨洮至遼東。延袤萬余里。

註…［正義］遼東郡在遼水東。始皇長城東至遼水、西南至海之上。

『史記』蒙恬列伝

（註）の「正義」には、「遼東郡は遼水の東にあり。始皇帝の長城は東、遼水に至る」とある。長城の東は遼水に至るという。

同じように『史記』匈奴列伝にも次のような（註）がある。

後秦滅六国。而始皇帝使蒙恬将十萬之衆、北擊胡。悉収河南地。因河為塞、築四十四縣城臨河、涉適戍以充之。而通直道、自九原至雲陽。因辺山険塹谿谷可繕者治之。起臨洮至遼東、萬余里。

註…括地志云、秦隴西郡臨洮縣、則今岷州城。本秦長城首。起岷州西十二里、延袤萬余里、東入遼水。　『史記』匈奴伝

（註）には、「起臨洮至遼東、萬余里」の説明として、秦の隴西郡臨洮縣、則ち今の岷州城が秦の長城の首（始まり）であり、「東は遼水に入る」とある。

万里の長城の東は「至遼水」、「入遼水」と書かれている。これは「起臨洮至遼東」という記述と同じ意味で書かれている。遼東に遼水という川があることがわかる。万里の長城は遼水まで延びている。

従来は遼水を今の遼河であると考えた。その結果、現在の歴史地図のような位置に万里の長城は描かれてきた。しかし万里の長城は碣石山に至ると書かれている。遼水は今の遼河ではなく、碣石山の近くにあるのではないだろうか。

(2) 遼水とは

遼水は古来から大河として知られている。『呂氏春秋』に遼水は次のように書かれている。

何謂六川。河水、赤水、遼水、黒水、江水、淮水。

註…遼水出砥石山、自塞北東流、直至遼東之西、南入海

『呂氏春秋』巻十三

（訳）何を六川というか。河水、赤水、遼水、黒水、江水、淮水をいう。

中国の代表的な六つの川について述べている。河水は黄河であり、江水は揚子江である。この中に遼水がある。遼水は春秋時代から知られた大河であることがわかる。

遼水は『説苑』にも出てくる。

> 齊桓公北征孤竹。未至卑耳、谿中十里。闟然而止。瞠然而視。（中略）有人、長尺。（中略）道之神也。走馬前者導也。左袪衣者前有水也。従左方、渡行十里。果有水。曰、遼水。　　『説苑』
>
> （概訳）齊の桓公が北に孤竹を征し、未だ卑耳に至る十里手前の谷の中での出来事である。背の高い人が現れた。道の神であるという。馬の前を走り導く。左前に着物を着た者がこの先に川があるという。左方に従い十里行くと果たして川がある。「遼水」という。

齊の桓公が燕の求めに応じて山戎を討伐したときのことである。孤竹を伐ち、そこから左（西）へ向かい令支へ行こうとしたのであろう。十里行くと遼水があるという。

この事件は『史記』にも次のように書かれている。

> （齊の桓公）二十三年、山戎伐燕。燕告急於齊。齊桓公救燕。遂伐山戎。至于孤竹、而還。　　『史記』齊太公世家
>
> （訳）齊の桓公二十三年（前６６３年）、山戎が燕を伐った。燕は齊に急を告げた。齊の桓公は燕を救う。山戎を伐ち、孤竹に至り、還る。

孤竹や令支の位置は『史記』の（註）に次のように書かれている。

> 桓公曰、寡人北伐山戎、過孤竹。

（註）［正義］括地志云、孤竹故城在平州盧龍縣南一十里。殷時諸侯孤竹国也。　『史記』封禅書

（訳）［正義］の括地志に云う、孤竹故城は平州盧龍縣の南一十里にあり。

盧龍縣は今も河北省の灤河（ラン河）の東にある。孤竹はその南１０里のところにあるという。

また令支については『国語』に（註）がある。

斉桓公……遂北伐山戎。　令支、斬孤竹、而南帰。

（註）令支、今縣、属遼西。　『国語』

孤竹と令支の位置は「図 24　孤竹と令支」のような位置に比定されている。

図 24　孤竹と令支

孤竹の西にある川は灤河である。齊の桓公が渡ろうとした遼水とは灤河であることがわかる。

万里の長城は「至遼水」、「入遼水」と書かれている。万里の長城の東端はこの遼水まで延びているということを記述しているのである。

「遼水の東を遼東という」とある。万里の長城は「至遼東」と書かれている。遼水の東まで延びているという意味である。それは「碣石山に至る」という記述とも一致する。万里の長城は現在の万里の長城と同じ位置に造られている。

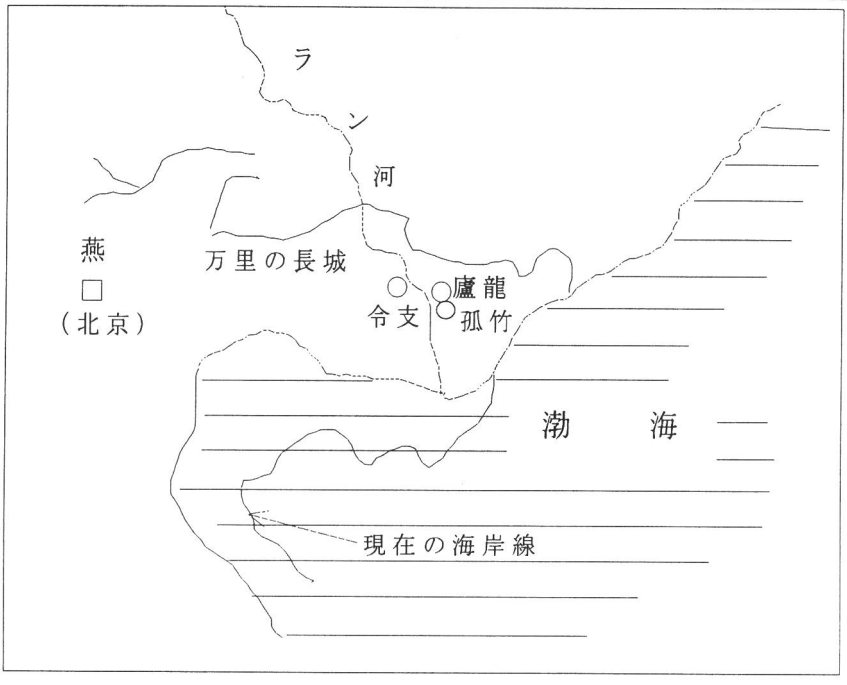

図 24　孤竹と令支

(3) 度遼将軍と遼水

元鳳三年（前７８年）、遼東の烏桓が背いたので度遼将軍を派遣してこれを撃つという事件が起こる。

（元鳳）三年冬、遼東烏桓反。以中郎将范明友為度遼将軍、将北辺七郡郡二千騎、撃之。　『漢書』昭帝紀

（訳）元鳳三年（前７８年）冬、遼東の烏桓が背いたので、中郎将の范明友を度遼将軍と為し、北辺の七郡（郡はそれぞれ二千騎）を将いて之を撃つ。

度遼将軍が初めて設置されたときのことである。度遼将軍とは「遼水を渡り敵を討つ将軍」の意味である。「度遼とは遼水を渡（度）る」という意味である。従来はこの遼水を今の遼河であると考えた。しかし、度遼将軍が設置された背景を考えるとそれは間違いであることがわかる。その背景とは匈奴との戦いである。

（元光）六年冬、匈奴入上谷、殺略吏民。遣車騎将軍衛青出上谷、騎将軍公孫敖出代、軽車将軍公孫賀出雲中、驍騎将軍李廣出鴈門。青至龍城。獲首虜七百級。　『漢書』武帝紀

（訳）元光六年（前１２９年）冬、匈奴が上谷に入り、吏民（官僚や人民）を殺略した。そこで車騎将軍衛青を遣わし上谷を出る。騎将軍公孫敖は代を出る。軽車将軍公孫賀は雲中を出る。驍騎将軍李廣は鴈門を出る。（衛）青は龍城に至る。首虜七百級を獲る。

漢は大規模な匈奴討伐軍を派遣している。しかし匈奴はその後も毎年のように殺略を続ける。

- 元朔元年（前１２８年）秋、匈奴は遼西に入り太守を殺す。漁陽・鴈門に入り都尉を敗り、三千餘人を殺略す。将軍衛青を遣わし、鴈門を出る。将軍李息は代を出る。首虜数千級を獲る。
- 元朔二年（前１２７年）匈奴は上谷・漁陽に入り、吏民千餘人を殺略す。将軍衛青・李息を遣わし、雲中を出て高闕に至る。
- 元朔三年（前１２６年）夏、匈奴は代に入り、太守を殺し、鴈門に入り、千餘人を殺略す。

■元朔四年（前１２５年）夏、匈奴は代・定襄・上郡に入り、数千人を殺略す。

■元朔五年（前１２４年）春、大将軍衛青は六将軍・兵十餘萬人を将いて朔方・高闕を出る。首虜萬五千級を獲る。秋、匈奴は代に入り都尉を殺す。

■元朔六年（前１２３年）春、大将軍衛青は六将軍・兵十餘萬騎を将いて定襄を出る。斬首三千餘級。

この年、武帝は次のように述べている。「今、中国は一統。しかるに北辺は未だ安からず。朕、甚だ之を悼む。」と。

■元狩二年（前１２１年）、匈奴は上谷に入り数百人を殺す。

■元狩三年（前１２０年）、驃騎将軍霍去病を遣わし、隴西を出て皐蘭に至る。斬首八千餘級。将軍去病・公孫敖は北地二千餘里を出て居延を過ぎる。斬首虜三萬餘級。匈奴は鴈門に入り数百人を殺略す。衛尉張騫と郎中令李廣を遣わし、皆右北平を出る。李廣は匈奴三千餘人を殺す。盡くその軍四千人を亡し、独り身で脱して還る。

秋、匈奴は右北平・定襄に入り、千餘人を殺略す。

■元狩四年（前１１９年）大将軍衛青は四将軍を将いて定襄を出る。将軍霍去病は代を出る。各五萬騎を将い、歩兵は軍の後に踵（つづ）くこと数十萬人。青は幕北に至り、單于を囲み、斬首萬九千級。霍去病は左賢王と戦い、斬り、首虜七萬餘級。

このように匈奴との戦いが続いている。これらの戦いからみると、匈奴の本拠地は現在の内蒙古自治区の西方であることがわかる。匈奴は上谷や漁陽にまで侵入しているが、匈奴を伐つ将軍は西方の代郡・鴈門・朔方等を出発し、さらに西へ向かっている。

匈奴と戦っている間に烏桓が力をつけてくる。烏桓は遂に背く。

> 元鳳三年冬、遼東烏桓反。以中郎将范明友為度遼将軍、将北辺七郡、郡二千騎、撃之。　『漢書』昭帝紀

（訳）元鳳三年（前７８年）、遼東の烏桓が背いた。中郎将范明友を度遼将軍として、北辺の七郡（郡はそれぞれ二千騎）を将いてこれを撃つ。

同じ事件が『漢書』匈奴列伝にも書かれている。

漢復得匈奴降者言、烏桓嘗発先單于冢、匈奴怨之、方発二萬騎撃烏桓。大将軍霍光欲発兵邀撃之。（中略）光更問中郎将范明友、明友言、「可撃」。於是、拝明友為度遼将軍、将二萬騎出遼東。匈奴聞漢兵至、引去。（中略）明友既後匈奴、因乗烏桓敝、撃之。斬首六千餘級。獲三王首。

『漢書』匈奴列伝

（訳）漢は匈奴の降服した者から次のようなことを聞いた。烏桓は匈奴の先代の單于の冢を暴いた。匈奴はこれを怨み二萬騎を発して烏桓を撃つであろうと。大将軍霍光は兵を発し之を邀撃（ようげき）しようと思った。（中略）そこでさらに霍光は中郎将范明友に撃つべきかどうかを問う。

范明友は言う、「撃つ可し」と。ここにおいて范明友を拝して度遼将軍と為し、二萬騎を将いて遼東を出る。匈奴は漢兵が至ると聞いて引去る。（中略）范明友は匈奴がすでに逃げ去った後であり、匈奴との戦いで烏桓は疲れていることに乗じてこれを撃つ。斬首六千餘級。三王の首を獲る。

范明友は度遼将軍となり、「二萬騎を将いて遼東を出る」とある。「度遼将軍」は遼水を渡り敵を伐つ将軍である。范明友は遼水を渡り、遼東を出るとある。

従来はこの遼水を今の遼河であると解釈した。しかしこの事件は匈奴と烏桓の戦いである。匈奴は内蒙古自治区の西側におり、烏桓は内蒙古自治区の東側に居

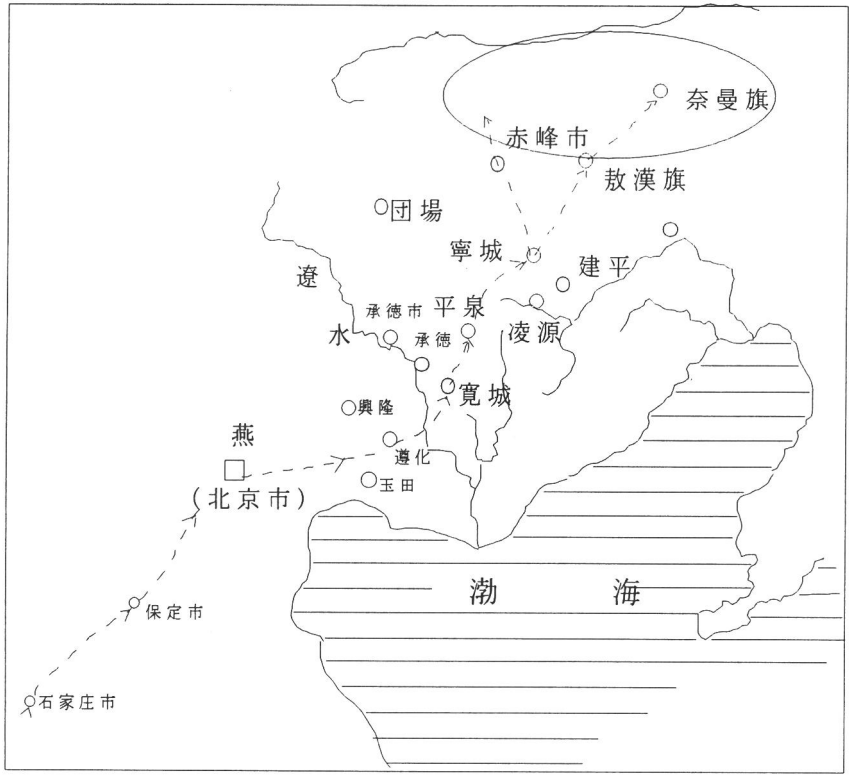

図 25　度遼将軍の進撃ルート

る。どちらも今の遼河よりもずっと西側にある。今の遼河の先は吉林省であり、そこに居るのは夫餘である。したがって度遼将軍が遼河を渡るはずはない。

この事件は匈奴が烏桓を撃ちに行ったのであるから戦場は烏桓の地であろう。内蒙古自治区の東側である。度遼将軍は、遼水（灤河）を渡り（度遼）、承徳、平泉、凌源、建平、寧城、赤峰市等を通って烏桓を撃ちに行ったのであろう。

図 25　度遼将軍の進撃ルート

この事件は元鳳三年（前７８年）である。この時点でも、遼水は灤河であることがわかる。

4　遼東と朝鮮

(1) 箕子

『史記』は箕子について次のように伝えている。

> 箕子者紂親戚也。紂始為象箸。箕子歎曰彼為象箸、必為玉桮為。為桮則必思遠方珍怪之物、而御之矣。（中略）紂為淫泆。箕子諫不聴。人或曰、可以去矣。箕子曰為人臣諫不聴而去。是彰君之悪、而自説於民。吾不忍為也。乃被髪佯狂而為奴遂隠。　『史記』宋微子世家
>
> （訳）箕子は殷の紂王（前１１５４－１１２２年）と親戚である。紂王は始め象牙の箸をつくった。箕子は歎（なげ）いて曰く、「彼は象牙の箸をつくった。必ずや玉の杯をつくるであろう。玉の杯をつくれば則ち必ず遠方の珍怪の物を欲するであろう。而して之を御することができようか。」（中略）紂王は淫泆と為る。箕子は諫めるが聴かない。人は或いは曰う、「去るべし」と。箕子は曰く、「人は臣となり、（君を）諫めても聴きいれられないので去れば、是れ君（王）の悪を明らかにし、而して自分を民に説く（弁解する）ことになる。吾はそれを為すに忍びず」と。乃ち髪を振り乱し、狂人をよそおい而して奴隷となり遂いに世間から隠れた。

その後紂王は周の武王に殺され殷王朝は滅ぶ。武王は箕子を訪問する。

武王既克殷、訪問箕子。武王曰、於乎維天陰定下民相和其居。我不知其常倫所序。箕子対曰、（中略）　『史記』宋微子世家

（訳）武王は既に殷に勝ち、箕子を訪問する。武王曰く、「ああ、天は陰で定めを維持している。下民は相和し其れに居す。我は其の常倫所序（常道の秩序）を知らない。」と。箕子は対（こた）えて曰く、（略）

箕子はここで武王に「鴻範九等（こうはんきゅうとう）」を教える。（略）

於是、武王乃封箕子於朝鮮。而不臣也。　『史記』宋微子世家
（訳）ここに於いて、武王は箕子を朝鮮に封じる。而して臣とはしなかった。

箕子が封じられたところを箕子朝鮮という。箕子朝鮮の位置については諸説があり、いまだ確定していない。朝鮮半島であるという説や中国東北地方であるという説がある。

(2) 朝鮮のはじまり

朝鮮という地名は箕子が封じられる以前から存在していた。「封箕子於朝鮮」という記述は朝鮮という地名が存在していたことを示している。

朝鮮という地名の始まりは『三国遺事』に次のように書かれている。

魏書云、乃往二千載有壇君王険。立都阿斯達。開国號朝鮮。與高同時。古記云、（略）號曰壇君王険。以唐高即位五十年庚寅。都平壌城。始称朝鮮。又移都於白岳山阿斯達。（中略）周虎王即位己卯。封箕子於朝鮮。壇君乃移於蔵唐京。　『三国遺事』

（訳）魏書に云う、二千年前に壇君王険あり。阿斯達に都を立てる。国を開き朝鮮と号す。高（堯）と同じ時期なり。

古記に云う、（略）號して壇君王険という。唐高の即位五十年庚寅を以て平壌城に都す。始めて朝鮮を称す。又都を白岳山の阿斯達に移す。（中略）周の虎（武）王が即位す（己卯年）。箕子を朝鮮に封じる。壇君は乃ち蔵唐京に移る。

壇君王険が朝鮮という地名を付けたとある。高や唐高は唐堯のことであり、『史記』五帝本紀に出てくる堯帝である。箕子が朝鮮に封じられて来たので、壇君はそこから逃げて蔵唐京に移ったとある。

(3) 朝鮮の位置

朝鮮はどこにあったのであろうか。
『呂氏春秋』の（註）に次のような記述がある。

非濱之東　（註）朝鮮楽浪之縣、箕子所封。濱於東海也。
『呂氏春秋』巻二十

（訳）朝鮮楽浪の縣、箕子の封じられた所。東海に濱す。

朝鮮の楽浪縣は箕子が封じられたところであるという。そこは「東海」に濱しているとある。東海については『説文解字』に次のように書かれている。

碣 …… 特立之石也。東海有碣石山。　『説文解字』

「東海に碣石山有り」とある。碣石山のあるところは東海である。また碣石山は長城の始まるところであり、そこは楽浪郡であるという。

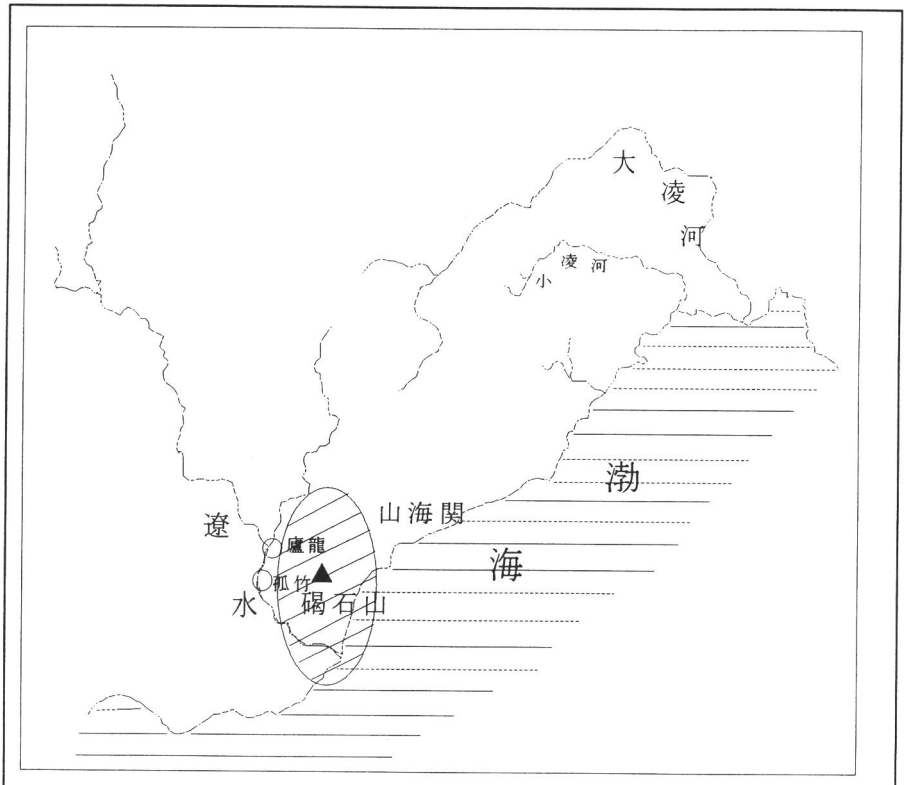

図 26　箕子朝鮮の位置

夾右碣石、入于海。

註…［集解］孔安国曰、碣石海畔山也。

［索隠］地理志云、碣石山在北平驪城縣西南太康。

地理志云、楽浪遂城縣有碣石山。長城所起。

水経注云、在遼西臨渝縣南水中。蓋碣石山二有。

此云夾右碣石入於海、當非北平之碣石。

『史記』夏本紀

「地理志云、楽浪遂城縣有碣石山。長城所起」とある。楽浪は箕子が封じられた朝鮮の楽浪であろう。朝鮮の楽浪に碣石山があり、そこは長城の始まるところであり、箕子が封じられた所であるという。

図 26　箕子朝鮮の位置

『山海経』「海内北経」に「朝鮮在列陽東、海北山南」とある「朝鮮」はこの朝鮮のことである。『山海経』はこれを「東北の隅」と書いている。

(4) 遼水と遼東

従来は、「遼東は遼河の東である」と考えてきた。その結果、遼東郡は遼河の東であるとしてきた。

ところが『史記』の（註）には、「遼東郡在遼水東」（遼東郡は遼水の東にある）と書かれている。遼水は灤河であるから遼東郡は灤河の東にあるということになる。

『呂氏春秋』の遼水の（註）にも次のような記述がある。

> 註…遼水出砥石山、自塞北東流、直至遼東之西、南入海
> （訳）遼水は砥石山を出て、塞（長城）の北より東流し、直ちに遼東の西に至り、南、海に入る。

「遼水は遼東の西に至り、南、海に入る」とある。遼水は遼東の西を流れるという。これは「遼水の東を遼東という」という記述と同じである。遼水の東を「遼東」といい、遼水の西を「遼西」というのである。

『史記』蘇秦列伝には次のような記述がある。

燕東有朝鮮・遼東、北有林胡・楼煩、西有雲中・九原。（略）
『史記』蘇秦列伝
（訳）燕の東には朝鮮と遼東があり、北には林胡と楼煩があり、西には雲中と九原がある。

朝鮮は碣石山のあるところにある。碣石山は燕の東にある。朝鮮はまさに燕の東にあり、「燕東有朝鮮・遼東」と一致する。遼東も遼水の東にあり、「燕東有朝鮮・遼東」と一致する。

5　燕と朝鮮

(1) 燕と東胡

燕と東胡の関係は『史記』匈奴列伝に次のように書かれている。

燕有賢将秦開。為質於胡、胡甚信之。帰而襲走東胡。東胡卻千余里。（中略）燕亦築長城。自造陽至襄平。　『史記』匈奴列伝
（訳）燕に賢将といわれた秦開が居た。秦開は胡へ人質に出された。胡は秦開を甚だ信用したという。ところが国に帰ると秦開は東胡を襲い追い出した。東胡は千余里退く。燕はその地に長城を築く。長城は造陽より襄平に至るという。

『契丹古伝』にも同じようなことが書かれている。

（注）…『契丹古伝』とは日露戦争の時、濱名寛祐氏が奉天（現在の瀋陽市）のラマ寺から写し持ち帰ったものである。題名は無く濱名氏が『契丹古伝』と名付けたという。

それには次のようなことが書かれている。

> 秦自是益豪。燕亦加彊。殷遂以孛涘勃大水為界、譲曼濯幹之壌、而東。（中略）至是燕築塞。繞曼濯幹城、曰襄平。　　『契丹古伝』
>
> （訳）秦は是より豪を益し、燕もまた彊（つよ）さを加える。殷は遂に退き、孛涘勃大水をもって境界とし、曼濯幹之壌を譲り、東へ退いた。（中略）ここにおいて燕は塞を築く。曼濯幹に城をめぐらす。これを襄平という。

『史記』では東胡となっているが、『契丹古伝』では殷と書かれている。『魏略』には（箕子）朝鮮となっている。

> 昔、箕子之後、朝鮮侯見周衰。燕自尊為王、欲東略地、朝鮮侯亦自称為王、欲興兵逆戦燕。（中略）乃遣将秦開、攻其西方、取地二千餘里、至満番汗為界。朝鮮遂弱。　　『魏略』
>
> （概訳）昔、箕子の後、朝鮮侯は周王朝が衰え、燕が自ら尊び王と為り、東の地（遼東・朝鮮）を攻め取ろうとするのをみて、朝鮮侯もまた自ら称して王となり、兵を興し燕と戦わんと欲した。（中略）乃ち燕は将軍秦開を遣わし、朝鮮の西方を攻め、地二千餘里を奪い、満番汗を以て界とした。朝鮮は遂に弱まる。

「箕子の後、朝鮮侯は」とある。朝鮮は箕子朝鮮であることがわかる。箕子朝鮮は燕よりも強かった。燕は賢将秦開を人質に出している。ところが燕は次第に

強くなり、朝鮮を追い出し、朝鮮の西方の土地二千餘里を取り、「至満番汗為界」とある。

『史記』には、東胡は千餘里退いたとある。「地二千里」とあるのは、燕に近い西方の土地を千里取られ、さらに千里退いたからであろう。

朝鮮は「燕東有朝鮮・遼東」の朝鮮であり、碣石山の近くに居た箕子朝鮮である。『史記』では「東胡」と書かれており、『契丹古伝』では「殷」と書かれている。

(2) 襄平

燕は朝鮮を追い出して長城を築く。

> 燕有賢将秦開。為質於胡、胡甚信之。帰而襲走東胡。東胡卻千余里。（中略）燕亦築長城。自造陽至襄平。置上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡。以拒胡。　『史記』匈奴伝

長城は「自造陽至襄平」とある。『契丹古伝』にも次のように書かれている。

> 秦自是益豪。燕亦加彊。殷遂以孛涘勃大水為界、譲曼灌幹之壌、而東。（中略）至是燕築塞。繞曼灌幹城、曰襄平。将又越孛涘渤、強行阻断。二国伐燕、克之。踰渝、及孤竹。盡復殷故地。及秦滅燕、乃與之、約卻地千里。以孛水為界、如故。　『契丹古伝』

（訳）秦は是より豪を益し、燕もまた彊（つよ）さを加える。殷は遂に退き、孛浚勃大水をもって境界とし、曼灌幹之壌を譲り、東へ退く。（中略）ここに至り燕は塞を築いた。曼灌幹に城をめぐらす。これを襄平という。（燕は）将にまた孛浚渤大水を越えて阻断しようとした。二国は燕を伐ち、これに勝つ。渝を越え、孤竹に及び、ことごとく殷の故地を回復す。
秦が燕を滅ぼすに及び、この地を与え、千里退くことを約束する。孛浚勃大水をもって界と為す。故の如し。

「燕は塞を築き曼灌幹に城をめぐらす。これを襄平という。」とある。『史記』には「燕亦築長城。自造陽至襄平」と書かれている。燕の長城の東端は襄平である。

『契丹古伝』では、一度は「東へ千里退く」とあり、『史記』の「千里退く」と一致しているが、その後故地を回復したとある。「燕を伐ち、これに勝つ。渝越え、孤竹に及び、ことごとく殷の故地を回復する」と書かれている。朝鮮は孤竹まで故地を回復している。孤竹は千里退く前の居住地であることがわかる。

孤竹の東に碣石山がある。碣石山は朝鮮にあり、箕子が封じられた所である。孤竹から碣石山にかけて朝鮮があったことがわかる。

燕はそこに長城を築き、「至襄平」と書いている。『契丹古伝』も「城をめぐらす。これを襄平という」と書いている。襄平は城で囲まれている。現在の万里の長城から推定すると襄平は山海関付近ではないだろうか。

従来は、襄平は遼寧省の遼陽市であるとされてきた。その結果、燕の長城は遼寧省の遼陽市まで築かれたとし、万里の長城はその東端が遼陽市であるとしてきたのである。

(3) 造陽

燕の長城は「自造陽至襄平」とある。造陽については『辞海』に次のように書かれている。

> 造陽　…　古地名。在今河北省独石口付近。　『辞海』

独石口は北京市の北にある。現在の万里の長城が通っている最も北にある都市である。「自造陽至襄平」とは、「独石口から山海関に至る」ということになる。これが燕の長城である。

造陽を張家口とする説もある。張家口も現在の万里の長城が通っている。「自造陽至襄平」は「張家口より山海関に至る」に変わるだけであり、長城の位置に変わりはない。燕の長城が現在の万里の長城の位置に造られていることはこれからも明らかであろう。

(4) 燕の五郡

燕は長城を築き五郡を設置する。

> 燕有賢将秦開。為質於胡、胡甚信之。帰而襲走東胡。東胡卻千余里。（中略）燕亦築長城。自造陽至襄平。置上谷・漁陽・右北平・遼西・遼東郡。以拒胡。　『史記』匈奴列伝

燕の長城は燕国を北方民族から守るために築かれている。燕の強敵は朝鮮である。燕は朝鮮に人質を出している。『史記』には燕は東胡（朝鮮）を追い出したので長城を築いたとある。燕の長城は朝鮮の反撃に対処するために造られていることがわかる。

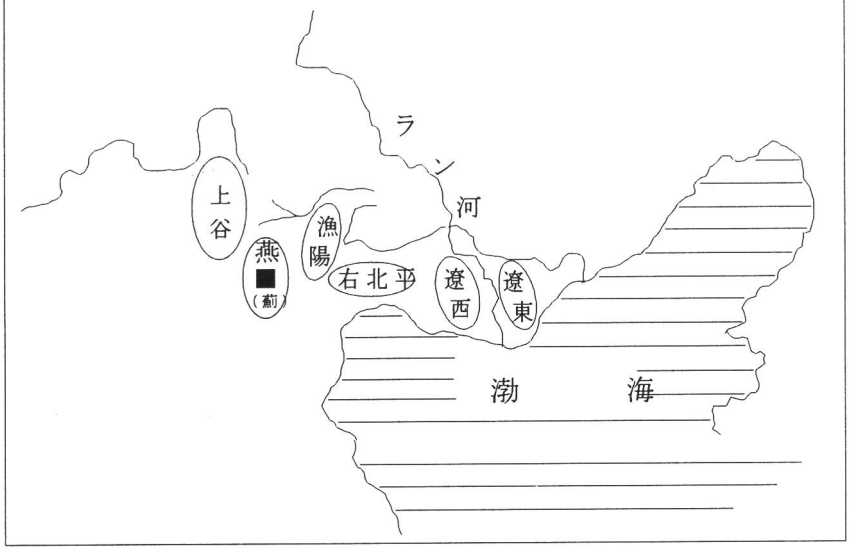

図 27　燕の五郡

朝鮮の本拠地は碣石山や孤竹を含む遼東の地域である。燕は朝鮮を追い出してそこに遼東郡を置いた。遼東郡は万里の長城の内側に置かれている。

遼西郡も万里の長城の内側に置かれている。遼西は遼水の西である。したがって燕の五郡は図のような位置になる。

図 27　燕の五郡

(5) 燕の滅亡と遼東

秦は燕を伐ち、中国全土を統一する。『史記』は燕の滅亡のようすを次のように伝えている。

二十年、燕太子丹患秦兵至国恐。使荊軻刺秦王。秦王覚之體解軻以徇而使王翦辛勝攻燕。燕代発兵撃秦軍。秦軍破燕易水之西。
二十一年、王賁攻薊。乃益発卒、詣王翦。軍遂破燕太子軍。取燕薊城、得太子丹之首。燕王東収遼東、而王之。
二十五年、大興兵使王賁将攻燕遼東、得燕王喜。

『史記』秦始皇本紀

（訳）二十年（前２２７年）、燕の太子丹は秦の兵が国に来るのを患え恐れた。荊軻（けいか）を使わし秦王を刺そうとした。秦王はこれを覚（さと）り、軻を捕らえ手足を切り離し、以て天下に示した。而して王翦（おうせん）と辛勝を使わし燕を攻める。燕と代は兵を発し秦軍を撃つ。秦軍は燕を易水の西に破る。
二十一年、王賁（おうほん）は薊を攻めた。乃ち益々卒（兵）を発し王翦の軍に送った。軍は遂いに燕の太子の軍を破り、燕の薊城を取り、太子丹の首を得る。燕王は東へ逃げ遼東を収め、而してここに王となる。
二十五年（前２２２年）、大いに兵を興し、王賁を将とし、燕の遼東を攻める。燕王喜を得る（捕らえる）。

『史記』燕召公世家にも燕の滅亡の様子が書かれている。

二十三年、太子丹質於秦、亡帰。二十七年、燕太子丹陰養壮士二十人。使荊軻献督亢地図於秦。因襲秦王。秦王覚、殺軻。使将軍王翦撃燕。二十九年、秦攻抜我薊。燕王亡徙居遼東。斬丹以献秦。三十三年、秦抜遼東、虜燕王喜。卒滅燕。

『史記』燕召公世家

（訳）二十三年（前２３２年）、太子丹は秦に人質となっていたが、亡げ帰る。二十七年、燕の太子丹は陰かに壮士二十人を養い、荊軻を使わし督亢の地図を秦に献じ、因りて秦王を襲う。秦王は覚り、軻を殺す。

将軍王翦を使わし燕を撃つ。二十九年（前２２６年）、秦は攻めて我が都の薊を抜いた。燕王は亡げて遼東に徙（うつ）り住んだ。太子の丹を斬り秦に献じた。三十三年（前２２２年）、秦は遼東を抜き、燕王喜を捕虜とし、ついに燕は滅びる。

燕が滅亡するとき、燕王喜は「東收遼東。而王之」、「燕王亡徙居遼東」と書かれている。従来は、遼東は今の遼河の東であると考えた。中国の『中国古代歴史地図冊』（遼寧人民出版社）の「秦統一六国図」でも、秦は遼河の東まで攻めているように描かれている。

図 28　秦による燕の滅亡（従来説）

しかしここには「東收遼東、而王之。（東に遼東を収め、ここに王となる）」と書かれている。「遼東を収める」とあるのは遼東の地はそれまでは燕の領土ではなかったことを示している。また「ここに王となる」とあるのも燕王喜は遼東の王ではなかったことを示している。この時はじめて遼東の王になっている。

『史記』のこの記述は『契丹古伝』と一致する。『契丹古伝』には、朝鮮（殷）は前２８４年に燕に追われて遼東から千餘里退くが、その後故地を回復したとある。遼東は再び朝鮮の領土になっている。遼東（遼水の東）は朝鮮が支配していたのである。そこへ燕王喜は逃げてきて遼東の地を手に入れ、王になったのである。

燕王喜が遼東へ逃げるルートは次のようになる。

図 29　燕王喜と遼東

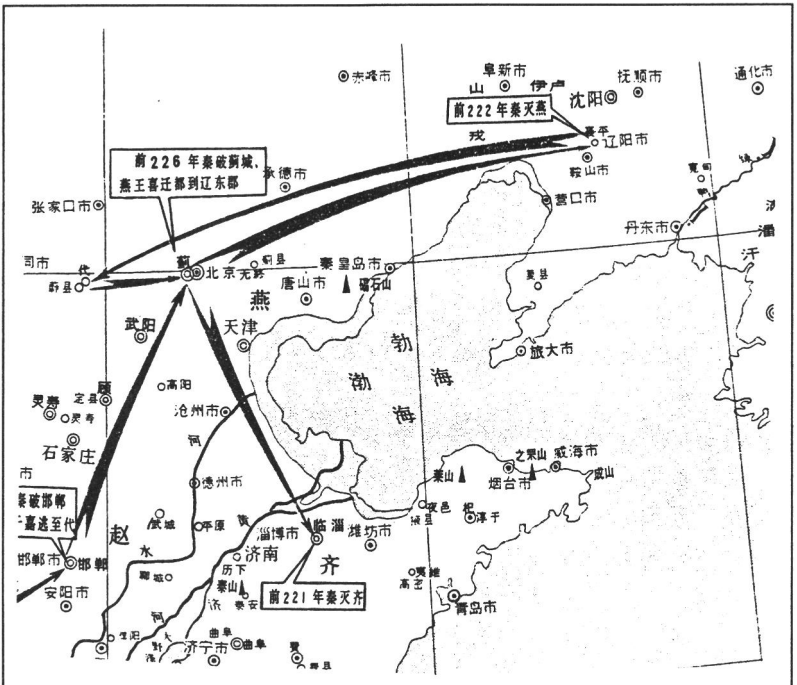

図 28　秦による燕の滅亡（従来説）

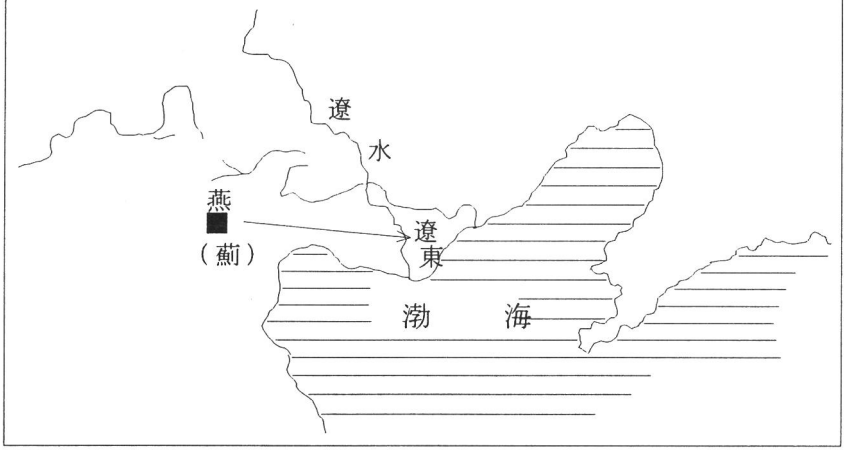

図 29　燕王喜と遼東